読める長文，楽しい多読・・・物語の力を授業に　第23回

「読みの力」から「書く力」へ

佐々木 忠夫（ささき・ただお 宮城県・小牛田農林高校）

1．はじめに～寺島メソッドと4技能

中学校の教科書を見ると，会話中心の教科書で，和訳は先生が言ってそれを書きとったり，和訳されたプリントの中の空所に日本語を埋めたりするような授業が大半であるらしい。このような授業が行われているとすれば，読みの力が育つわけがない。

そこで10年ほど前から寺島メソッドを使って，教科書だけではなく，ほかの英文も読んできた。材料は英語の絵本である。（新英語教育4月号，2016参照）寺島メソッドでは4技能の相互関係について次のように考える。

四技能	指示の仕方
話せる	単文で書けるようにせよ。
聴ける	英語のリズムで音読せよ。
書ける	たくさん読め。
読める	記号をつけて，語順を意識化せよ。

読む力は書く力へさらに話す力へと転移するのである。したがって，読む力はそれらの土台となり，それをどう育てるかが大事になってくる。

しかし，今のコミュニケーション中心の英語教育ではなかなかそれが育っていないのが現実である。

そのような授業の中で，英語が不得意になってしまった生徒が本校に入学してくる。

2．英文をもっと読むことで読みの力を

寺島メソッドで授業を行ってきて，どんなに英語の苦手な生徒でも自分の力で英語が読めるという確信がある。授業が終わってもプリントにくぎ付けになっている生徒の姿をたくさん見てきた。

自分の力で英語が訳せることに，自信をつけていく。そして，物語のおもしろさに引っ張られ，読み進めていけるようになる。

そして，英語の基礎基本である語順も身についていく。寺島メソッドでは特に，「名詞＋動詞＋名詞」と「前置詞＋名詞」と一般にいわれる従属節である。

3．絵本 *Misako's A-bombed Piano* を読む

今年度，もう一人の担当者と相談して，修学旅行でピースメッセージの実践を行うことにした。

絵本 *Misako's A-Bombed Piano*（教科書 *Vivid I* の旧版）を読み，それをもとにピースメッセージを書く。原作は文・松谷みよ子，絵・木内達朗の『ミサコの被爆ピアノ』であるが，この教科書のために英訳したものである。

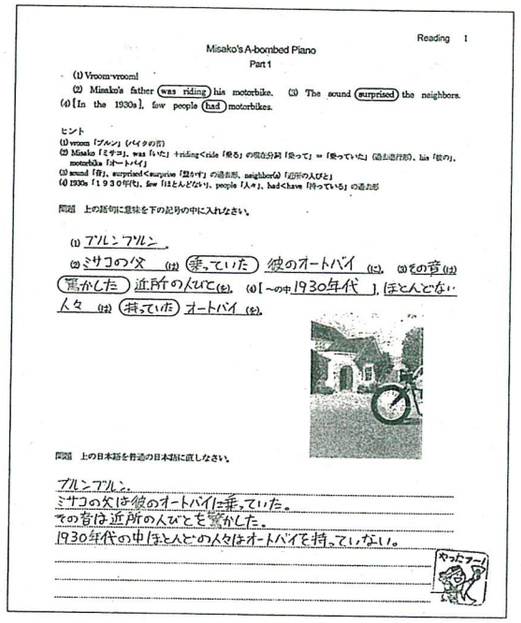
この絵本は実話に基づいて書かれたが，今まで読んできた絵本のように身近な問題ではないため，生徒が原爆の恐ろしさをどれほどリアルに理解できるのだろうかという不安もあった。

生徒たちによれば，中学校時代までに原爆投下の事実は習ってきているが，その実相はほとんど知らないようだった。

そのような状況では，この絵本だけではその事実が伝わりにくい。たとえば，絵本では原爆が落ちたときの衝撃を，A strong wind shook the factory. と表現しているが，これだけではそのすさまじさは実感できない。また，被爆直後の広島の様子も，fires all over，lots of bodies lying in the streets，like ghosts，begging for water などの言葉で表されている。原爆資料館などを訪れて資料を読んだり，語り部の人の話を聞いたりしていれば別だが，その言葉だけではやはり生徒には原爆の恐ろしさは十分に伝わらない。

そこで事前にNHKスペシャル「きのこ雲の下で何が起きたか」を視聴することにした。さらに16歳で被爆した谷口稜曄のことを絵本にした「生きている限り語りつづける」（これは英語版もあるが，残念ながら今回は時間がとれないので日本語版になった）を読むことにした。絵本を拡大し，それを紙芝居のように，読み聞かせをした。

それから，*Misako's A-bombed Piano* を読み始めた。4人1組となって，頭をつきあわせながら，英語の語句の意味を記号の中に埋め，一文一文を丁寧に和訳していく。語句の意味を埋めていっても，それは英語の語順の日本語である。それを普通の日本語に直すのだが，自分で日本語にすることができない場合がある。それだけ，日本語の力もないのだ。それを友人と協力しながら，和訳をする。


Reading　1

Misako's A-bombed Piano
Part 1

(1) Vroom-vroom!
(2) Misako's father (was riding) his motorbike.　(3) The sound (surprised) the neighbors.
(4) [In the 1930s], few people (had) motorbikes.

ヒント
(1) vroom「ブルン」（バイクの音）
(2) Misako「ミサコ」，was「いた」＋riding<ride「乗る」の現在分詞「乗って」＝「乗っていた」（過去進行形）．his「彼の」，motorbike「オートバイ」
(3) sound「音」，surprised<surprise「驚かす」の過去形，neighbor(s)「近所の人びと」
(4) 1930s「1930年代」，few「ほとんどない」，people「人々」，had<have「持っていた」の過去形

問題　上の語句に意味を下の記号の中に入れなさい。

(1) ブルン ブルン。
(2) ミサコの父 (は) 乗っていた 彼のオートバイ (に)，(3) その音 (は) 驚かした 近所の人びと (を)，(4) [～の中 1930年代]，ほとんどない 人々 (は) 持っていた オートバイ (を)。

問題　上の日本語を普通の日本語に直しなさい。

ブルン ブルン。
ミサコの父は彼のオートバイに乗っていた。
その音は近所の人びとを驚かした。
1930年代の中ほとんどの人々はオートバイを持っていない。

このように読んできて，生徒たちはどのように感じたのだろうか。ある生徒は「自分で英語の絵本を訳すことで普通に読むよりも深く考えて読むことができました」と言っている。日本語で書かれたものだったらさっと読んでおしまいだ。しかし，英語で読むことでゆっくりと，より深く思考しながら読んでいったのだろう。

もうひとりの生徒は，「私はこの学習をするまで本当に無知だったと実感しました。原爆は恐ろしいものだと言われても「そうなんだ」と思うだけで，何の脅威にも思いませんでした」と言っている。

そして，先ほどあげたような語句は，事前学習の力を借りて，頭の中にイメージとなって現れ，絵本の中の原爆のすさまじさ，恐ろしさを表す言葉がよりリアルに迫ってきたのである。たとえば，lots of bodies が単なる「体」ではなく，「死体」であり，いたる所にあることを知ったのである。

英語を読むことはただ英文の表面的な意味がわかるのではなく，テーマを読み取ったり，使われている語句のもつイメージやリアリティを読み取ったりすることだ。また，それが読むことの楽しみでもある。

4．ピースメッセージを書く

上記の読みの活動後，ピースメッセージを書いた。

それぞれの活動後に400字程度の感想を書いておき，それを元に「原爆についての私の意見」として日本語1,000字程度で書いた。

事前に文章は序論，本論，結論と分けて，何をどのように書くかを提示した。そして，結論の一部を英語に直し，ピースメッセージにした。

また，「原爆についての私の意見」を書く段階で，英語に直すことを念頭に置いて，できるだけ単文で書くようにも指示した。それは複雑な日本語の文は英語に直すことは難しいからである。そして，基本構造の「名詞＋動詞＋名詞」（寺島メソッドでは「センマルセン」と言う）が見つけやすくなる。

その後，述語に○をつけ，主語と目的語や補語を探し，下線を引くようにした。そして，英語に直すときは「センセンマル」の日本語を「センマルセン」の英語に直していった。

その結果，生徒たちの書いた英文をALTにチェックをしてもらったが，意味の伝わる英文が書けているということだった。中には添削を必要としない作品もあった。

5．「読むこと」が4技能の基礎基本

英語教育で会話中心の授業が展開されてきて以来，高校入学時の英語力は落ちている。

スピーキングをさせていれば，スピーキング力はつくという思い込みと，4技能がどのような関係になっているのかを無視して会話中心の授業を推し進めた結果であると思う。

スピーキングもライティングもリスニングも，その土台はリーディング力である。その力をつけずに，いくら会話練習をしてもどの力もほとんどつかない。寺島メソッドでいう「ザルみず効果」になっている。

英文をきちんと読み取ることで，英語の基本構造がわかる。大きな間違いをせずにどんどん読み進めることができるようになり，それがライティングやスピーキングの力の基礎になる。

学校の英語教育では，特に精読を通してこの力をつけることが最優先され，ライティングやリスニングやスピーキングの力を伸ばすべきである。